

大学入試の“温故知新”！

80周年の受験情報誌『螢雪時代』にみる 学校・入試制度の変遷、受験生の感性

旺文社 教育情報センター 23年4月

23年3月11日に発生した巨大地震「東北地方太平洋沖地震」で被災された生徒・学生・保護者、学校・大学関係者はじめ、皆様に心よりお見舞い申し上げます。

学校では4月に入り新年度を迎えましたが、被災地と福島第一原発事故による避難周辺地域では入学時期や授業開始の目処も立たず、学校教育活動の大幅な遅延、学習活動の停滞を余儀なくされるところも少なくありません。こうした中で大学進学を決意している受験生は、苦難の受験準備を強いられることとなりますが、進学が成就するよう念じています。

ところで、小社の大学受験情報誌『螢雪時代』は、前身の『受験旬報』が昭和7(1932)年に創刊されてから、今年で80周年になります。

そこで、これまであまり知られていない昭和初期から戦時下にかけての学校制度と「旧制大学」進学や入試方法、「旧制高校」受験、戦後の「新制大学」発足当初の入試状況、及び各時代の受験生から小誌に寄せられた“受験ユーモア・コント”などを振り返り、今に続く大学入試のミニ昭和史を紐解いてみました。



1. 昭和初期～戦時下:「旧制高校」受験時代

<“複線型”の学校制度と多様な進路>

戦前・戦中の学校制度は、戦後の新教育制度下における学校制度に比べ複雑で、所謂“複線型”といわれるように様々な学校種に分かれ、上級学校への進路も多様に分岐していた。

昭和初期の学校制度と進路のおよそのイメージは、次のようなものである。

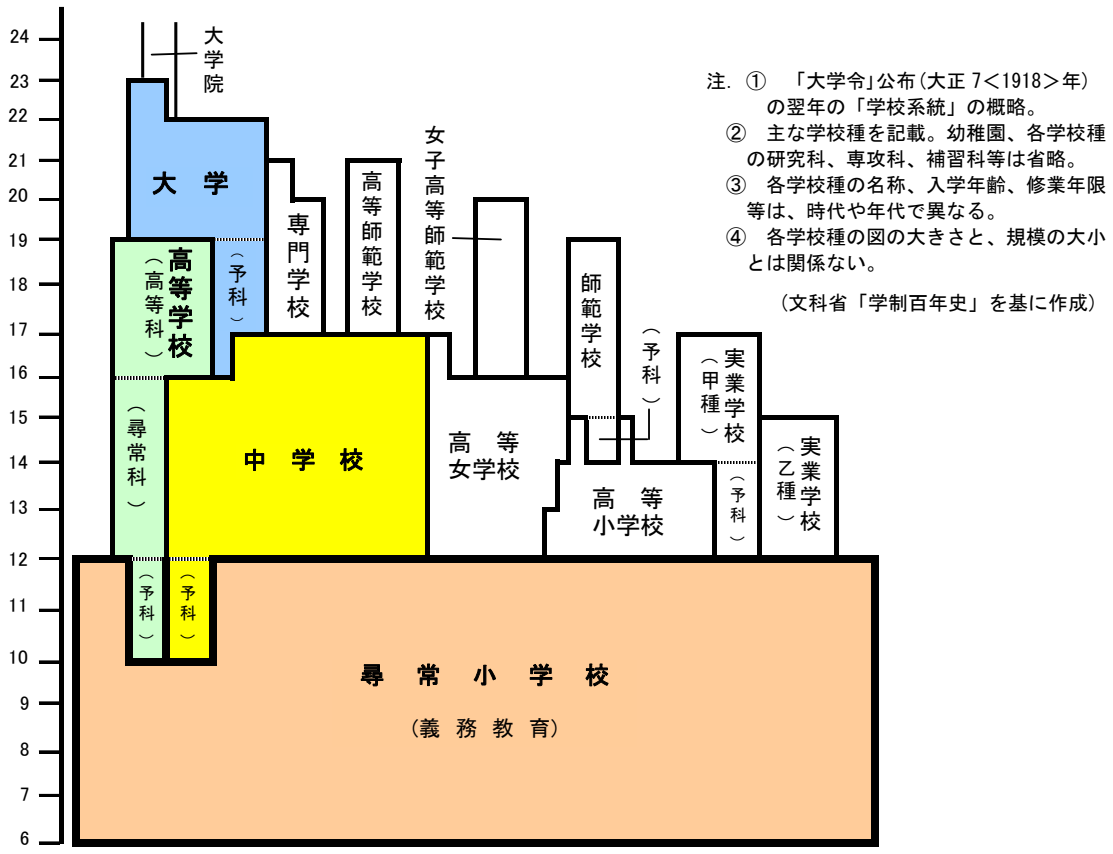
まず、「尋常小学校」で6年間の義務教育を終えた後、そのまま社会に出る、あるいは2年間の「高等小学校」に進むといった、初等教育機関のコースがあった。

他方、義務教育終了後、上級学校の旧制「中学校」(旧制中学)に進み、さらに旧制「高等学校」(旧制高校)などから、旧制「大学」(帝大、官立大、公立大、私立大。以下、旧制を省略)、あるいは「高等師範学校」や旧制「専門学校」などの高等教育機関へ進む進路があった。

また、「高等女学校」や「師範学校」、「実業学校」などの進路も併設されていた。

(図1参照)

●戦前の「学校系統」のイメージ図（大正8<1919>年） (図 1)



<大学への進学と入試>

○ 大学への進学コース

昭和15(1940)年の旧制中学は全国で600校、生徒数約43万人で、旧制中学への進学率は約7%だった。また、この時代の大学数は50校(旧外地に設置した大学含む)近くで、学生数約8万人であった。

その頃の大学としては、東京・京都・東北・九州・北海道・大阪・名古屋の各帝大(文部省所管外として京城<朝鮮総督府>・台北<台湾総督府>の2帝大)のほか、東京商科大、神戸商業大、東京工業大、東京・広島各文理科大、新潟・岡山・千葉・金沢・長崎・熊本各医科大などの官立大、京都府立医科大・大阪商科大などの公立大が設置されていた。

私立学校(専門学校)は大正7(1918)年の「大学令」公布により、続々と「大学」への昇格を果たし、大正9年の慶應義塾大・早稲田大を皮切りに、明治大・法政大・中央大・日本大・國學院大・同志社大がそれぞれ昇格。以後、東京慈恵会医科大・龍谷大・大谷大・専修大・立教大・立命館大・関西大など、大正15年(1926)年までの大正年間だけでも総計22大学が昇格している。これらの大学には、法律学校や宗教系の系譜をひくものが多い。

昭和10(1935)年代の大学への主な進学コースは、尋常小学校(昭和16<1941>年からは国民学校<初等科6年、高等科2年>に改編)卒業後、旧制中学 → 旧制高校(高等科。以下、同) → 大学/旧制中学 → 大学予科 → 大学/旧制中学 → 大学専門部(→ 学部)などであった。このうち、大学予科 → 大学/旧制中学 → 大学専門部のコースは、私立大に多くみられた。(図1参照)

また、旧制中学 → 旧制高校 → 大学といった一連の教育課程は、当時の多様な教育体系の根幹をなすものであり、大学は所謂“最高学府”として位置づけられていた。

なお、各教育機関の修業年限や入学資格等は年代によって変更されており、特に戦時下では修業年数の短縮が図られた。

○ 大学入試の実態

昭和10年代の大学への入学資格は、「旧制高校高等科卒業者及びこれと同等以上の学力のある者(旧制専門学校卒業者等)、大学予科修了者」となっていた。また、大学専門部への入学資格は「旧制中学卒業者及び同資格者」などであった。

大学入学者選抜(入試)については、入学志願者数が当該大学(学部・学科等)の定員を超過した場合に、各大学(学部)の規定(入試科目等)によって実施されていた。

東京帝大の試験科目は各学部規定によるが、文系＝外国語、国語、漢文、歴史などから、理系＝外国語、数学、物理、化学、生物学、力学、植物、動物などから、出題されていた。

◇「優先順位制」の入試方法◇

当時の大学入学者選抜方法としては、志願者の出身学校によって入学に関する“順位”を付与する「優先順位制」が採用されていた。

これは、予科を置く大学では予科修了者に、予科を置かない大学の文系学部では旧制高校「文科」卒業者に、理工医学系学部では旧制高校「理科」卒業者に、それぞれ入学に係る“優先順位第1位”を付与していた。

“優先順位第1位”の志願者数が当該大学(学部)の定員を超えた場合、その「第1位志願者」のみについて入試が実施された。

他方、第1位志願者数が定員を満たさなかった場合は、第1位志願者全員が“無試験合格”となり、欠員補充は「優先順位第2位以下」の志願者に振り向けられた。

欠員補充に旧制高校以外の出身者があてられたことから、それらの入学者は“傍系入学者”と呼ばれた。

たとえ帝大であっても、第1位志願者数が少なく定員に欠員を生じた場合、第1位志願者は“無試験合格”が許可されていた。

例えば、東京帝大や京都帝大の場合、文学部では学科によって第1位志願者数が定員を満たさない年度もあり、無試験入学者もいたようだ。他の帝大でも理系や医学、法学等は第1位志願者数が多く厳しかったが、無試験同様の学部(学科)もみられた。

東京帝大や京都帝大以外の帝大では、傍系入学者も少なくなかったようだ。

◇ 今も昔も変わらぬ進路選択の重要性 ◇

旧制高校から大学へ進学する際には、まず志望分野(学部・学科)を決め、次に出願大学を決めなくてはならない。東京帝大の場合、入学資格者は「旧制高校高等科及び旧制の学習院高等科(当時は官立)卒業者、及びそれと同等以上の学力のある者」とされていた。

これらの入学資格者で“優先順位第1位”に指定され、実力に自信のある者は当然、東京帝大(競争倍率のある人気学部・学科)を受験したであろう。

しかし、受験に“絶対合格”はない。不運にも東京帝大が不合格になり、所謂“白線浪

人”（旧制高校生の白線つき制帽に因む）になる者も少なくなかったようだ。

第1位志願者であることを有効に使い、第1位志願者の少ない他の帝大や学部・学科に出願しておけば、無試験入学を果たせたかもしれない。

進路選択、出願校や学部・学科の選定の重要性は、今も昔も変わらなかったようだ。

<旧制高校は帝大への“予備門”>

○“弊衣破帽”のエリート育成

旧制高校は、専門教育あるいは高等普通教育を施す高等教育機関(尋常科4年、高等科3年。高等科=文科、理科)であったが、実質的には帝大への準備教育機関であり、帝大への“予備門”として見なされていた。

昭和10(1935)年頃の旧制高校の学校数は全国でわずか32校、生徒数は2万人以下(予科を含む)であった。

昭和10年代終期の旧制高校としては、第一(東京：現・東京大。以下、「現」を略)・第二(仙台：東北大)・第三(京都：京都大)・第四(金沢：金沢大)・第五(熊本：熊本大)・第六(岡山：岡山大)・第七(鹿児島：鹿児島大)・第八(名古屋：名古屋大)の各高等学校(ナンバー・スクール)のほか、新潟(新潟大)・松本(信州大)・山口(山口大)・松山(愛媛大)・水戸(茨城大)・山形(山形大)・佐賀(佐賀大)・弘前(弘前大)・松江(島根大)・東京(東京大)・大阪(大阪大)・浦和(埼玉大)・福岡(九州大)・静岡(静岡大)・高知(高知大)・姫路(神戸大)・広島(広島大)・富山(富山大)といった所在地名を冠した各高等学校、武蔵・甲南・成蹊・成城の私立の高等学校などがそれぞれ設置されていた。(表1参照)

●東京帝大の旧制高校(ナンバー・スクール)別入学状況 (昭和10<1935>年度)

(表1)

学部	実績	一高	二高	三高	四高	五高	六高	七高	八高	他校含む合計
法	入学者数	90	18	44	15	53	30	15	20	655
	受験者数	184	56	90	53	119	80	45	66	1,635
	入学率	48.9%	32.1%	48.9%	28.3%	44.5%	37.5%	33.3%	30.3%	40.1%
経済	入学者数	20	10	8	10	14	8	9	19	352
	受験者数	24	17	13	17	20	10	13	24	491
	入学率	83.3%	58.8%	61.5%	58.8%	70.0%	80.0%	69.2%	79.2%	71.7%
文	入学者数	32	8	10	18	17	6	12	15	400
	受験者数	33	10	10	19	20	6	13	18	446
	入学率	97.0%	80.0%	100.0%	94.7%	85.0%	100.0%	92.3%	83.3%	89.7%
医	入学者数	30	9	5	3	5	3	3	14	165
	受験者数	85	34	15	13	12	11	6	32	510
	入学率	35.3%	26.5%	33.3%	23.1%	41.7%	27.3%	50.0%	43.8%	32.4%
工	入学者数	43	14	12	12	12	10	5	26	324
	受験者数	135	73	25	43	36	53	15	63	927
	入学率	31.9%	19.2%	48.0%	27.9%	33.3%	18.9%	33.3%	41.3%	35.0%
理	入学者数	20	3	2	3	2	3	2	8	104
	受験者数	37	6	4	4	3	5	4	15	183
	入学率	54.1%	50.0%	50.0%	75.0%	66.7%	60.0%	50.0%	53.3%	56.8%
農	入学者数	14	6	4	8	8	11	8	12	221
	受験者数	15	13	6	11	12	14	11	17	336
	入学率	93.3%	46.2%	66.7%	72.7%	66.7%	78.6%	72.7%	70.6%	65.8%
総計	入学者数	249	68	85	69	111	71	54	114	2,221
	受験者数	513	209	163	160	222	179	107	235	4,528
	入学率	48.5%	32.5%	52.1%	43.1%	50.0%	39.7%	50.5%	48.5%	49.1%

<解説> 東京帝大の入学率は5割以下で、当時としても最難関であった。特に医学部(入学率32.4%:医学科30.3%、薬学科43.2%)、工学部(同35.0%)、法学部(同40.1%)などは、厳しかったようだ。

ただ、文学部の入学率は9割近くに達し、志願者の少ない学科によっては、優先順位第1位の志願者には無試験入学もみられたという。

他方、表中の旧制高校(ナンバー・スクール)の実績を見ると、入学率では第三高・第七高・第五高が5割に達しているが、入学者数では第一高が249人、全体の11.2%で突出している。

因みに、入学者数第2位は浦高(埼玉)の140人(占有率6.3%、入学率53.6%)である。

注. 入学率=入学者数÷受験者数

(小社刊『受験旬報』昭和10年4月下旬号より)

旧制高校といえば、破れた衣服や制帽といった“弊衣破帽”や、寮歌を声高に歌う“高歌放吟”をイメージする向きもいよう。旧制高校は、語学重視の教育やリベラル・アーツの発想に基づく教育を主体に、学寮生活などを通して将来の社会的指導者としての素養を培うなど、モラトリアムの性格をもつエリート育成の特権的学校でもあった。

○ 旧制高校の入試

◇ 受験事情 ◇

旧制高校生は、帝大への“優先順位第1位”、つまり“入学保証書”を手に入れたも同然であった。そのため、旧制高校の入試は帝大へ進学するための“登竜門”であり、それだけに旧制高校の入試は非常に厳しい受験競争が展開されていた。

こうした当時の受験事情から、小社刊行の『受験旬報』や初期の『螢雪時代』（『受験旬報』を改題した昭和16年から新制大学の発足まで）の読者の多くは、旧制高校への進学志望者で、旧制大学・旧制高校へ進学するための“受験情報・対策誌”として必携であった。

◇ 入試方法 ◇

旧制高校高等科への入学資格は、旧制中学4年修了者とされていた。その入学者選抜（入試）方法は、学科試験（筆答試問）、口頭試問（人物考査）、及び身体検査の結果などをもとに、総合的に判定されていた。

因みに、第一高等学校の学科試験（昭和13年度）は、文科＝国語漢文、日本地理、数学、外国語／理科＝国語漢文、物理、数学、外国語で、実施時期は3月半ば過ぎであった。

<戦時下の混沌とした教育体制と入試>

これまでみてきた時代は、主に小社の『受験旬報』が創刊された昭和7(1932)年頃から太平洋戦争勃発前の昭和10年代半ば頃までである。

昭和12(1937)年の日中戦争以後、国の文教政策にも戦争の影響が出はじめていたが、昭和16(1941)年12月からの太平洋戦争以後は、学校と大学の在学年限や修業年限の短縮措置が講じられるなど、戦時体制下での非常時教育の施策が次々と打ち出されていった。

○ 旧制高校などの入試

戦局の逼迫は旧制高校などの入試にも影響を及ぼし、受験準備教育の受験生への負担などを考慮して、口頭試問を重視した入試が行われていたようだ。

また、昭和20(1945)年頃の入試は、第一期が旧制高校、高等師範学校／第二期が官立の専門学校、青年師範学校／第三期が臨時教員養成所などと、3期に分けて実施されていた。

○ 変則的な大学入試

昭和17(1942)年度からは、旧制高校高等科及び大学予科の卒業時期が9月に繰り上がったため、大学の入学時期も10月に改められた。

このため、大学入試の実施時期も帝大と官立大では、①8月半ば過ぎから、②9月初めから、③9月下旬から、④大学が定める日、の4期に分けて実施されていた。

しかし、昭和18年度入試は1回しか行われず、翌19年度には戦時の勤労働員等を考慮し、学科試験を課さず、調査書等によって入学を決めていたようだ。

このように、戦時下の入試は国の戦時教育政策の影響を受け、入試の実施方法等は年ご

とに大きく揺れ動かされていた。

◇ 学徒出陣 ◇

戦局の悪化による兵力不足に対処するため、国は学徒にも戦時動員を迫った。昭和18(1943)年には理工科系及び教員養成系諸学校の学生を除く、一般学生の徴兵猶予を停止して旧軍隊に入隊させるといった措置が断行された。

昭和18年10月21日、「出陣学徒壮行会」が東京・明治神宮外苑競技場で行われ、雨の中、約7万人の出陣学徒が参加したといわれる。全国で徴兵された学徒兵の中には、戦死した者も少なくない。

なお、昭和20(1945)年4月から21年3月までの1年間、国民学校初等科を除き、学校の授業は原則として停止されることになり、学校教育は最後の決戦段階に突入するに至った。



2. 終戦直後の大学入試:「新制大学」受験

<教育改革への取組>

○「教育使節団」と「教育刷新委員会」

昭和20(1945)年8月の終戦によって、日本は連合国軍の占領下に置かれた。連合国軍最高司令部(総司令部)の要請を受けアメリカから派遣された「教育使節団」は、昭和21年3月、日本の教育改革の基本方策をまとめた「報告書」を総司令部に提出した。

総司令部では、教育・文化担当部局のCIE(民間情報教育局)を通して、「報告書」に示された教育理念や改革方策によって戦後の教育改革を進めるよう日本側に求めた。

日本政府はこれを受け、当時の教育者や文化人などからなる「教育刷新委員会」を内閣に設置し、昭和21年9月から審議を開始。戦後教育の柱となる「教育基本法」や「学校教育法」などの教育法制の整備を審議・立案し、戦後教育の体制をつくりあげた。

○ 新制大学の発足

“教育の憲法”ともいえる「教育基本法」(昭和22<1947>年3月公布・施行)とともに「学校教育法」が制定され、学校教育に関する法規が整備された。

これによって、前述した戦前・戦中の“複線型”学校体系から、小学校6年・新制中学校3年・新制高等学校3年・新制大学4年の所謂「6・3・3・4制」の“単線型”学校体系に転換された。

高等教育機関については、旧制高校、大学予科、旧制専門学校、師範学校等が旧制大学と統合、改編されて、4年制の「新制大学」に一本化された。

なお、旧制専門学校のうち4年制大学に転換しなかったものは、暫定措置として修業年限2年または3年の短期大学とした(昭和39<1964>年に暫定措置を撤廃、恒久化)。

新制大学の発足は、昭和23(1948)年4月(関西の公立1校、私立11校が発足)以降、旧制から新制への移行が本格化した。特に国立大の設置については、前述のCIEが、大学の大都市集中を避けて教育の機会均等を実現するため、“1府県1大学”(旧・府県制)の方針

を求めていた。文科省はこれを踏まえて昭和 24 年 5 月に「国立学校設置法」を制定し、特別な地域を除いた 1 県 1 大学設置の原則の下に 69 校の新制国立大が誕生した。

＜新制大学の入試＞

○ 文部省の基本方針

新制大学(以下、大学)の入試は、昭和 24(1949)年度から本格的に実施されることになるが、昭和 24 年度入試の実施方法等について、当時の文部省は次のような基本方針を大学側に求めている。

1. 高等教育を受けるに最も適応した能力を備えているものを選抜すること
2. 下級学校の教育を理解し、その円満な発展を助長するような選抜方法をとること
3. 入学者選抜自体が一つの教育であるから、教育目的に沿うように選抜方針をたてること

そして、入学者の判定は、「進学適性検査・学力検査・身体検査、及び調査書の成績」を総合して行うものとしている。

○ 進学適性検査

「進学適性検査」は、大学進学志望者の進学適性を検査するもので、「学力検査」ではないとされていた。検査の内容は、大学での教育を履修するのに十分な資質があるかどうか、文系、理系のいずれに適するかをみるもので、高校 1 年程度の文物的問題と理物的問題とが含まれていた。

この「進学適性検査」は、昭和 24 年度の第 1 回新制大学入学者選抜から実施された。国立大では文部省が問題を作成し、全国一斉に行われた。公私立大では、国立大とともに実施することも各大学独自の進学適性検査を行うこともできた。

しかし、この検査は、練習効果が顕著に出ること／そのための受検準備が激化し、学力検査との二重の負担になったこと／大学の利用が積極的でなかったこと／予算が十分でなかったこと／国立大学協会、全国高等学校長協会等から中止の要望が出たことなどから、昭和 30(1955)年度から一斉実施は廃止された。

○ 国立大「1 期・2 期校制」

国立大の入試については、大学を 1 期校と 2 期校の 2 グループに分け、それぞれ別の試験日程で行われた。初回の昭和 24 年度入試だけは、「国立大学設置法」の公布が 5 月末であったことから、試験期日は、1 期校は 6 月上旬から、2 期校は 6 月中旬からであった。昭和 25(1950)年度からは、まず 1 期校の試験日が 3 月初旬、2 期校の試験日は 1 期校の合格発表後の 3 月下旬に設定(公立大は 3 月初旬から各大学で定める)され、一斉に実施された。1 期校、2 期校のグループ分けは、文部省の「大学入学者選抜実施要項」の別表で定められ、廃止されるまでの 30 年間ほぼ固定されていた。(表 2 参照)

「1 期・2 期校制」の区分については、法学部はじめ、文・教育・理・医・薬・歯学部で著しく偏っている／地域的にも不均衡／2 期校における出願者数に対する実受験者数の割合が極めて低く、入学辞退者も多い／国立大間の社会的な“差別観”を招いた／高校における 1 期校への進学率の優劣が学校評価に繋がる傾向にある、などの問題点が指摘された。

このため「1期・2期校制」は、「共通第1次学力試験」実施前年の昭和53(1978)年度まで続けられたが、翌年度から廃止された。国立大の試験期日は昭和54年度以降、昭和62(1987)年度の「連続方式」導入の前年度まで一本化されていた。

●国立大「1期・2期校制」実施最終年度(昭和53年度入試)のグループ分け (表2)

1 期 校			2 期 校		
北海道大	豊橋技術科学大	熊本大	旭川医科大	東京外国語大	大阪教育大
岩手大	三重大	大分医科大	小樽商科大	東京学芸大	神戸商船大
東北大	滋賀医科大	宮崎大	帯広畜産大	東京商船大	奈良教育大
筑波大	京都大	琉球大	北見工業大	東京農工大	和歌山大
千葉大	大阪大		北海道教育大	横浜国立大	島根大
お茶の水女子大	神戸大		室蘭工業大	富山大	山口大
東京大	奈良女子大		弘前大	福井大	香川大
東京芸術大	鳥取大		宮城教育大	山梨大	愛媛大
東京工業大	島根医科大		秋田大	信州大	高知医科大
東京水産大	岡山大		山形大	静岡大	九州工業大
一橋大	広島大		福島大	愛知教育大	福岡教育大
長岡技術科学大	徳島大		茨城大	名古屋工業大	佐賀大
新潟大	高知大		宇都宮大	岐阜大	大分大
富山医科薬科大	九州大		群馬大	滋賀大	宮崎医科大
金沢大	九州芸術工科大		埼玉大	京都教育大	鹿児島大
浜松医科大	佐賀医科大		電気通信大	京都工芸繊維大	
名古屋大	長崎大		東京医科歯科大	大阪外国語大	

(小社刊『螢雪時代-臨時増刊号 全国大学受験年鑑』<昭和52年12月>より)

<時代を映した受験生の“ユーモア・コント”>

本稿ではここまで、戦前・戦中の旧教育制度における学校制度や進学・受験の実態、戦後の新制教育制度発足当初の大学入試の状況などをみてきた。

これらの時代を通して、小社の『受験旬報』と『螢雪時代』の「受験ユーモア」欄に受験生から寄せられた“ユーモア・コント”の一部(昭和8<1933>年～昭和24<1949>年)を以下に紹介する。コントからは、その時代の世相とともに、幅広い蘊蓄に裏打ちされた往時の受験生の感性がうかがえる。

受験ユーモア・コント

<昭和8年>

★ 化学入試問題解答

(問) 沃化加に硫黄を加えたら、化学変化起こるや否や。

(答) $KI + S_2 = KISS$

暗所にて化学的変化を起こし、発音発熱を伴い、これにより入試に落第するという致命傷を受けることあり。

注。「沃化加」はヨウ化カリウム

<昭和9年>

★ Touching Friendship

Future Admiral —

“Say, what’s the idea wearing my raincoat?”

Room-mate —

“You wouldn’t want your new suit to get wet, would you?”

*添付された「訳」

いじらしい友情

未来の海軍大将 — 『おい君、僕のレインコートを着るなんて、一体どうした考えかい?』

室友 — 『君は、君の新しい服を雨に濡らしたくはないだろう、どうだい?』

<昭和 11 年>

★ 聊か椽が遠い

A 氏「君、孔子を英語で何と
いうか？」

B 氏「Confucius だ！」

A 氏「では、孟子は？」

B 氏「Mencius だろう」

A 氏「じゃ、芭蕉は？」

B 氏「モチ、Banana！」

注. 椽=垂木。「椽大の筆」(立派
な文章)になぞらえたのか。

★ ナルホド

A「僕は昨夜夢を見た」

B「どんな夢だった」

A「一高にパスした夢さ」

B「どんな気持ちだった」

A「夢のようだった……」

★ そうもとれる

ラブレターを見られた僕

「お父さん、なぜ“親展”
と書いてあるのに開けるん
ですか」

親爺「お前は馬鹿だ!“親が展
く”と書いてあるのがわか
らんか」

★ 物理の口頭試問

試験官「一般に、物体に熱を
加えれば膨張するが、熱を
加えて収縮するものがあり
ますか」

得意然として受験生曰く、
「あります。それは、スル
メであります」

試験官「ウム」

<昭和 14 年>

★ 自信

A「僕はすっかり自信がつい
た。一高でも九分九厘確実
だよ」

B「え、ほんとか。何時そん
なに勉強したんだ」

A「うん、だが、あとの九割一
厘がね、危ないんだ」

B「?……」

<昭和 16 年>

★ ヤマ問答

試験旬日に迫った代数
の時間

生徒代表「先生、地理の先生
も試験のヤマを教えてく
れましたから、先生もヤマ
を教えてください」

代数の先生「地理に山はある
が、代数には遺憾ながら山
がないのでね」

生徒代表「ギャフン」

<昭和 18 年>

★ 幾何公理

A「X 線は、どうして見えな
いんだろう」

B「線は、長さはあるが、幅
がないからだよ」

<昭和 19 年>

★ 不沈艦

ル大統領「なんとか、沈まぬ
軍艦が出来ないものかね」

建艦技師「木で造っては如何
なもので……」

注.「ル大統領」は、ルーズベ
ルト大統領

★ 疎開

甲「いよいよ疎開が強化され
てきたね」

乙「うん、空襲の目標になる
東京駅も疎開するそうだ」

甲「!？」

<昭和 20 年>

★ 実績

〇〇中学卒業生の実績
(但し、昭和 19 年度)

高等学校 なし

官公私立専門 6 名

大学予科 29 名

軍需会社(徴用) 120 名

学校長告示

「諸君よ、安心して勤労に励
むべし。卒業後は願書、受験
料の要らぬ実績においては
本校一番のところがある」

<昭和 22 年>

★ 男女共学の悩み

浪人 A「俺はつくづく政府
をうらみたくなるよ」

浪人 B「どうしたんだ？」

浪人 A「男女共学さ」

浪人 B「それがどうかした
のか」

浪人 A「妹の奴が来年〇高
を受けるんだよ」

浪人 B「君の妹さんは級長
だから、大丈夫だろう」

浪人 A「実は俺も〇高志望
なんだ。奴が入って、俺
がすべってみろ……」

★ 停電

A「このごろは、停電が多く
て困るよ。勉強も出来や
しない」

B「暗記するには、もってこ
いじゃないか」

<昭和 24 年>

★ とんでもない

A「息子さんは、皆お元気で
すか」

B「実は、長男は東大の医科
に、次男は慶應の医科に
入ってましてね」

A「それは、お楽しみですね」

B「いえ、早く退院してくれ
りゃいいんですが」

★ カイリ(漕)とマイル(哩)

弟「兄ちゃん、今日、学校
で長さの単位を習った
よ」

兄「それは何？」

弟「カイリとマイルだよ。
どう違うか知っているか
い？」

兄、さも得意そうに、
兄「カイリは帰る時、マイ
ルは行く(参る)時使うだ
けさ」

(2011. 04. 大塚)